

「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである(マタイ 1:21)」。言い方を変えればこうなる。「この子は自分の民を罪から救うから、イエス=ヨシュア(ヤハウエ「主」は救いの謂)の名がふさわしい」。つまり「名は体を表す」ということだろう。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。[その名はインマヌエルと呼ばれる]。この名は、[神は我々と共におられる]という意味である(1:23)」。

降誕する神の御子には、二つの名と、二つの意味があるらしい。とはいえ、「主は救い」であることと、「神が共におられる」ことはどう結びつくのか。

「救われる」こと、「神が共におられる」ことは意味が解らずとも何だかありがたい。それにしても「自分の民を罪から救う(1:21)」ために、「神が共におられる(1:23)」必要があるのか。人間を罪から「救う」ために、わざわざ「神が共におられ」なければならぬのか。そもそも「インマヌエル/神が共におられる」とはどんなことなのか。「神の御子」が神と共におられるのは当然だとしても。

「インマヌエル/神は我々と共におられる」ために神の御子が降誕される。それでは、そのインマヌエルはどのように終わるのか。

イエス最後の言葉を聞こう。十字架にかけられ「エリ、エリ、レマ、サバクタニ/わが神、わが神、なぜわたしを見捨てるのか(27:46)」と大声で叫んだ。何ということか。「インマヌエル」の文体と似ているし、御心に忠実だった生涯の最後「神は共におられない」とは。

「イエス(主は救い)」と名付けられた方がこうでは、我々には到底「神は共におられない」のではないか。福音書はこんな危なっかしいことを語って、いったい何を伝えようとしているのか。

示されたこの危険な一本橋は、危険だが渡らざるをえない。だから落ち着いて、慎重に進むことにしよう。

神は「どのような我々」と共におられるのか。「この子は自分の民を罪から救う(1:21)」。そうだ、罪ある我々と、だ。

なぜか罪に囚われた我々と共におられようとする神。彼の時代の、彼の民の罪人だけのことではない。あれから二千年が経ち、言語や慣習のまるで異なった末弟子の、八ヶ岳伝道所の罪ある我々と共におられる。それも今に限ったことではない。永遠に、共におられる。その真実を知らせるために「マリアは男の子を産む(1:21)」。我々はこの真実をクリスマスとしてお迎えする。

降誕において「神は我々と共におられる(1:23)」のに、十字架で「神は共におられず(27:46)」イエスは神なき者になった。何が起きているのか、不可思議が心身を巡る。

その結果、罪なき御子が神に見捨てられ、罪人たる我々が神と共にある。こんなイメージが浮かぶ。イエスは御自分の「席」を我々に譲って下さったのか。

御自分の「救いの席」を我々に渡し、自らは死に沈んでいった。「インマヌエル/神は我々と共におられる(1:23)」救いが、十字架という深い闇に灯っている(ヨハネ 1:4~5)。

「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に(イザヤ 7:11)」。陰府のしるしは十字架かもしれないが、天のそれは認識不可能。「それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる(7:14)」。それは「インマヌエル(7:14)」。足許の、確かな、仄かな灯。



#### 《おまけのひとこと》

親鸞「悪人正機」の教えは広く知られている 痛快でダイナミックな逆説 歴史として現れると 降誕と十字架になろう 痛快の余地ないほど地に沈んだものだが 罪人であることの救いは具体的だ